日本を出て社会活動をしている人は多い。私はいま客員教授としてメキシコにいるが、そこで出会った「ソーシャル・ランドスケープ協会」という活動を紹介したい。

中心の一人は萩野美穂氏。一九七〇年生れの現代芸術家。大手保険会社に勤めたあと、カナダ・日本・アメリカと現代芸術界を渡り歩く。ロサンゼルスでは現代芸術界の渦中にいたが、「みんなつらそうに同じようなものを造っているだけ」と感じ、二〇〇三年にメキシコへ。九〇年代にも留学で滞在したメキシコは、壁画運動を始めとして、芸術が社会に近い国として知られる。虚構のガラス細工のようなアメリカの現代芸術界に別れを告げた後の選択だった。

二〇〇九年、萩野氏は、メキシコの父と日本の母を持つ芸術家のソリーリャ太郎氏に出会う。現代芸術界に疑問を持ち、社会と芸術の関係を考える二人は意気投合し、「ソーシャル・ランドスケープ（パイサヘ・ソシアレ）」を開始、二年後に法人格を取得した。

活動のコンセプトは、「アートで人間の関係を変える」というものだ。具体的には、高齢者施設や児童養護施設で、定期的にワークショップを開くことを中心としている。

メキシコは平均寿命が七七歳となって高齢化が進み、出生率も六〇年代の三分の一まで低下して、都市部では家族での高齢者ケアが困難になりつつある。しかし高齢者施設は、数も少なく内容も不十分だ。萩野氏らがワークショップを行なっている高齢者施設も、四年前に活動を始めた時は殺風景な内装で、高齢者は寝ているかテレビを見ているだけだった。医師や看護師との関係も悪く、高齢者の親族もめったに寄り付かない。

そこで萩野氏らは、高齢者に版画やスケッチ、紙細工などを作ってもらうワークショップを開いた。当初は高齢者の反応も悪く、医師も彼らの活動に懐疑的だったが、地道に通い続けることで信頼を獲得。部屋も改装して作業用のオープンスペースを設け、内装も明るくし、高齢者自身の作品を飾りつけた。

こう書くと「環境改善」や「作業療法」のようだが、彼らの活動は「関係を変えるアート」である。高齢者が作るは、萩野氏らプロが指導する「芸術作品」で、来年は展覧会も予定されている。

そして外部者が定期的に出入りすると、施設内の閉鎖された関係が変わった。高齢者がワークショップを楽しむようになっていくと、認知症の劇症発作も減った。医師と高齢者の関係も改善され、家族が訪れることも増えた。

さらに、高齢者を美術館に連れて行く。車椅子の高齢者が訪れると、美術館がバリアフリー状態でないことが露呈する。そうすることで、高齢者が変わるとともに、美術館と美術館員が変わる。

医師が指導する「作業療法」は、医師が患者を変えようとはするが、医師は変化しないのが前提だ。しかし萩野氏らの活動では、お互いが変化していく。現代芸術界に疑問を持つアーティストはメキシコにもおり、萩野氏らの活動に共鳴してそうした画家や写真家が参加してくると、彼らのあり方も変化する。まさに「アートを通じて関係が変わる」のだ。最近始めた児童養護施設でのワークショップも、メキシコ人芸術家と共に子供たちを指導している。

また彼らは、こうした経緯を全て撮影し、デザインを施してウェブ上に掲載する。これは広報でもあるが、芸術活動でもある。それが反響を呼んで、メキシコ人のボランティアがやってきたり、寄付が集まったりする。その全過程を記録すること自体が、一種の参加型パフォーマンス・アートだともいえるだろう。

萩野氏やソリーリャ氏の活動はそれだけではない。メキシコ各地に住む一一一人の日系メキシコ人一世を、六年がかりで撮影した写真集は、今年出版の予定だ。東日本大震災時は、メキシコ人芸術家たちの寄贈作品を販売して寄付を行なったほか、放射能情報をスペイン語でウェブ上に発信し、在日ラテンアメリカ人に提供した。震災二周年時には、メキシコ中から集まった震災救援募金に感謝するアートイベントも行っている。

彼ら自身は、芸術教育や講演などで生活しており、活動での収益はほとんどない。仲間と一緒に集合住宅に住む生活は楽しそうでもあるが、ぎりぎりでもある。しかし萩野氏は、この活動を「やっていると自分がほっとする」という。一人で創作し業界内の評判を競う芸術界から、社会を変えるアートに転身した彼らだが、じつはもっとも「アートに変えられた」のは、彼ら自身だったかもしれない。